



対策ではなく、
本人の必要を

津守 真

子どもにも家庭にも、ある時期、たいへんなときがある。たとえば、夜になっても母親と外出したい子どもが私の養護学校にいた。その時期が長くつづき、家族も疲れ切った様子で、職員たちは何とか手助けをしたいと思った。保育が終わってから、どうしたらよいか、長い時間をかけて話し合った。話しているうちに、職員がどのよう
にローテーションを組んだら無理なく助けられるかということに気が奪われてしまっ



た。そんなとき、きつと、だれかが「これはへんじやないか」とことばを差し挟んだ。「みんな、対策で頭が一杯になって、子どものことを考えていない」という発言に、私共ははっとさせられた。子どもの側に立ってみればどうなのか、周囲が大変なときには一番悩んでいるのは子どもにも違いない。子どもは何を困っているのか、何を表現しようとしているのか。それこそが皆で考えを出し合わねばならないのではないか。それに気が付いたとき、私共の議論の方向も、対応の仕方も変わった。

同じようなことを、私はいま大人の福祉の場で経験している。どうしてもひとりで外に出掛けたい男性がいる。夜中や明け方に出て行く。いつ出て行くか分からないので、職員は目が離せない。こんなとき職員の議論も、外に出て行かないための対策になりがちである。本人の側から見たときには、絶えず見張られている生活で不愉快であるに違いない。ひとりの職員が、これはどうしても地域のホームの生活をしなければ根本解決にはならないから、自分が引き受けようと言った。そして数か月間休暇もとらないで、その人との生活をし、その人の求めている生活を理解するよう努力しはじめた。しばらくして、この男性はもはや人の目をぬすんで外出することはなくなり、ひとりで留守番をしても安心な状態になった。その途中で何度も、ホームをどうやって運営するか、財政はどうするかという議論があった。そう考えていると、また



対策に終わってしまい、その人が何を必要としているかということが抜けてしまう。私共の議論の輪の中に米国で勉強している最中の若い人が加わっていた。私は現在の米国の福祉の専門の人達だったらこのような場合にどうするかを尋ねた。米国だったら、本人にとって何が必要かを関係者が集まって討議する。そしてその人にとって望ましい生活をどうつくるか、目標が決まったら、それを達成するために皆で邁進するという。そうすると何年かたつうちにそれができてしまう。日本だと最初の段階で、それは理想論だという話になって先が進まない。何をするにしても財政基礎が必要なことは言うまでもない。経済も人間も、どちらも大切なことはだれもが分かっている。しかし人間の福祉と教育の分野では、決定の決め手を、子ども最優先、人間最優先（ビープルファースト）にするかどうかが問われる。紙一重の差で最終の決定をどちらに賭けるかによって先は全く違ってしまう。現在、日本の教育が当面している問題もこれではないか。